

待降節 第2主日

マタイ 3・1-12

2013.12.8 9:30 ミサ

オリビエ・シェガレ

(パリミッション会司祭)

待降節の時期に入れば、ちょっと怖い荒れ野の洗礼者ヨハネの声が聞こえてきます。ご存知のように聖書の荒れ野は、禿げた小さな山々が果てしなく連なる光景を連想させます。平らな所がなく、でこぼこは無限に広がる。突風が起こると飛び交う砂に覆われて道が消え、方向がわからなくなり、迷ってしまいます。洗礼者ヨハネの目から見れば、こうした荒れ野は神の道から離れた人間の心、または方向性が見えない社会の象徴ですが、今の私たちの目から見ても、現代社会の状況は荒れ野のように映るのではないのでしょうか。砂のような情報の旋風の中に生きていて、方向を示す目印がどんどん消えていく。そして多くの人、特に小さき人々がでこぼこの多い道に躓き、傷つきます。若者が、良い知恵を示す大切な目印がなく道に迷い、明日に対する不安の中に生きています。

このような社会にあって、2千年前だけではなく、今もヨハネの声が福音の声となって響いています。「道を整え、その道筋をまっすぐにせよ」と。この声は私たちの心に届いているのでしょうか。

ヨハネは最も偉大な預言者であるとイエスが誉めてくれました。ヨハネの生き方には曲がったところがなかったからです。政治家や軍隊や知識人、あらゆる人に対して、どう言われても、批判を恐れず、世間の目を憚らず、真っ向から人の生き方を問いかけるヨハネは、言うべきことを言って迎合していません。当時の敬虔で、アブラハムの子だと自慢していたファリザイの人々に警告を与えたと同じように、良い信者だから大丈夫だとか自己弁解している私たちに対しても安心するなど、はっきりした警告を与えています。

今の時代に生きている私たちはこのヨハネの生き方を真似することは到底できないでしょう。非常に複雑になった現代社会にあって、私たちはなかなか真っすぐな生き方ができません。生き残るためにどうしても懸命になり、時々賢くなり、言うべきことを言わずに迎合してしまうことが多いでしょう。

信念を貫こうとすると、あなたは拘こたわりすぎるとか、頑固だと批判されてしまいます。教会の中でも、社会的な方向性のある信徒の活動の信者は、あなた方が偏っているとか、心が狭いとか批判され、白い目で見られることがあります。しかしこうした非難に対してヨハネが負けていなかったし、私たちも負けてはいけません。ヨハネのようにあらゆる真理や正義の証しに当たった時、ある程度の頑固があってもいいでしょう。皆がニコニコして、言うべきことを言わない教会共同体は決して福音の世界ではありません。

ヨハネは本当の意味でラジカルな人でした。ラジカルという言葉は日本語になると過激派とイメージが出てくるが、本来違うでしょう。過激派というのは考え方ややり方が秩序を急激に変革しようとして、暴力に走りがちで、世間の常識からひどくかけ離れている人々をさすが、radicalはラテン語語源のradix、ルーツがあり、本来の意味は物事を根っこから考えることです。方向を見失った混迷な現代社会に当てはめておけば、根本から共に生きることを問い直し、根幹から生き方を問いかけていくことの意味となろう。あるいは問題の根っこにメスを入れて行動を起こすことの意味。「斧はすでに木の根元に於かれている」というヨハネのことばにはこうしたラジカリテイ、悪を根っこから抜き取り、根底から社会を変えていくという意味が含まれていると思います。

ヨハネは社会だけではなく、一人一人に向かって根っこから生き方の方向を問い直してほしいと訴えます。これはヨハネの言葉で言えば「悔い改め」という訴えです。自分の生き方を根底から神様の望む方向に取り戻してほしいということなのです。

現代でもヨハネの声がいろんな人々に受け継がれ受け継がれて、愛と義のために闘っている様々な人々の叫んでいる声を通して私たちの耳に届いているはずで、環境問題、平和問題、いじめ問題、人権問題、貧困問題という町のデモに響いている声、教会の歪んだ部分の改革を訴える教皇様の声、教会共同体を開かれた場にしたい司祭や信徒の声、世界中に響く様々な声に耳を向けることは、悔い改めを促すヨハネの声に耳を傾けることです。待降節二当たって、こうした声は、私たちの心を目覚めさせる福音の声であり、神様ご自身の声でもあります。この声を受け入れ、回りの人に響かせながら、生き方の方向を神の方に向け直しながら、神の国の到来を待ち望む心の用意をできれば私たちは幸いです。